

聖徳寺

寺泊の高台から日本海を見下ろす浄土真宗の寺院。聖徳寺の神聖な宝物は、幾度もの火災や激動の世紀を生き抜いてきました。その豊かで詳しく記録された歴史は、この海岸沿いの村落にこれほど多くの寺院が創建されるようになったことを表しています。境内を散策する人は、自由に扉を開けて本堂に入り、参拝したり見学したりすることができます。

歴史

聖徳寺は、石川県能登の弘誓寺の住職であった願念によって 1593 年に創建されました。願念は京都の東本願寺の住職であった教如の弟子です。浄土真宗の本山である本願寺の門徒として、戦国武将の織田信長（1534-1582）と大阪の石山本願寺を拠点に武家支配に反対する僧侶や農民の反乱との間で起こった石山合戦（1570-1580）に参加。この抗争で功績を挙げた願念は、教如から弘誓寺を去り、東北地方で浄土真宗を広めるように指示されました。弘誓寺を弟に託した願念は、30 人の信徒と、新しい寺の礼拝の対象となる 2 つの霊宝を携えて旅立ちました。寺泊に一時的に滞在するつもりであったが、願念が宿主の家で 3 日間説法をした後、村人たちは願念に留まるよう懇願しました。願念は村人たちの求めに応じ、寺泊に留まることを決意し、聖徳寺を創建しました。

聖徳寺は、江戸時代（1603-1867）中期に焼失した後、現在の場所に再建されました。

流浪の生活と芸術的な業績で知られる僧、良寛（1758-1831）は、聖徳寺の第9世住職であった円雅と親交を結んだといわれ、二人が交わした詩の一例も残っています。戊辰戦争（1868～1869年）で寺は再び焼失したが、二度の焼失を免れた二種の霊宝は、現在も寺に安置されています。

本堂：黄金の聖域

大きな本堂の内部は仏教の浄土を思わせる装飾が施され、聖域の壁には金箔が貼られ、豪華な祭壇、金色の欄間には豊かな牡丹の彫刻が施されています。大きな白象の像は、釈迦の誕生を祝う祭りで子供たちが通りを引っ張り歩いているときは、内陣の入り口の右側に置かれています。この像は、釈迦の母親が夢の中に現れたとされる白い象を表しており、釈迦の受胎を象徴しています。

聖徳寺の本尊は、無限の光と命を持つ仏、阿弥陀仏像です。聖徳寺の創建にまつわる特筆すべき宝物は、浄土真宗の開祖である親鸞（1173-1263）の木造坐像と聖徳太子（574-622）の絵画です。聖徳太子は、日本に仏教が伝来した当初、行政統治を改革し、仏教を広めたとされています。聖徳太子は国家、皇室、仏教の守護神として崇拝されています。本堂には、聖徳太子の木像、浄土真宗の七祖巻物などの神聖な物も安置されています。

寺院の庭園

聖徳寺の庭園は、江戸時代中期に現奈良県の大和石を用い、京都の熟練した庭師が大
阪から船で寺泊に運んで造られたと考えられています。庭園は、鯉や睡蓮で彩られた小さな
池を中心に設計されています。片側の人工の丘にはツツジが植えられ、春にはピンクと白の花
が咲き乱れます。庭園は、寺院の客殿の内部から眺めることも、本堂の裏手にある小さな竹
の門から入って散策することもできます。